調査コラム～史料調査の現場から　第 25 回

松江市の新収蔵資料紹介（3）林幸之助所蔵史料

1．林幸之助所蔵史料

「防空訓練アリ」「夜東本町二焼夷弾実験ヲ見二行ク」（昭和 17 年８月 24 日）（注 1）

今年（令和４年）松江市に寄贈された文書のひとつに、母衣尋常高等小学校の学事史料があります。これは大正 12 年（1923）から昭和 15 年（1940）頃まで同校で教鞭（きょうべん）をとった林幸之助氏が所有していたもので、この度、ご子孫から学事史料や日記を含めた６点をご寄贈いただきました。【林幸之助所蔵史料目録／PDF:80KB】

林幸之助氏【写真 1】は、明治 44 年（1911）に島根県師範学校を卒業。最初の赴任先は、美濃郡益田町立実業補習学校・同尋常高等小学校でした。その後、簸川郡の稗原村尋常高等小学校や荘原村学頭尋常小学校などで教鞭をとり、大正 12 年に、松江市母衣尋常高等小学校に着任しました。国民学校令が施行された昭和 16 年（1941）には、松江市朝酌国民学校長に任命され、昭和 18 年（1943）に 55 年の生涯を終えるまで、現役の教育者として教壇に立ち続けました。

【写真 1】林幸之助氏（1888～1943）

冒頭の一文は、昭和 17 年（1942）、当時 54 歳の幸之助氏が記した、ある一日の記録です。昭和 12 年（1937）の日中戦争にはじまる戦争の火の粉は、年を経るごとに色濃く、次第に人々の日常を脅かすようになりました。日記には毎日のように「空襲」「防空訓練」「焼夷弾実験」「教練査

閲」「〇〇陥落」といった単語が並びはじめ、事態がいよいよ緊迫局面にあったことをうかがわせます。その一方で、「子どもらは大変はしゃぎ始末におへぬ騒ぎをする」「卒業式挙行、朝から凡（すべ）てどんちやんした」「学校トシテハ相当ナ難関デアツタ〔中略〕然シドウヤラコヽマデハ切リ抜イテ来タ」といった日常の描写からは、子らの成績に関心を寄せる父の姿や、多忙な勤め人の苦悩といった、今と変わらぬ日常のあったことに気づかされます。

【写真２】「参考文書綴」

さて、ご存知のように、昭和 12 年（1937）７月には盧溝橋（ろこうきょう）事件に端を発する日中戦争が勃発し、同年９月には国民の戦争協力を促す「国民精神総動員運動」が開始されました。「挙国一致（きょこくいっち）」「尽忠報国（じんちゅうほうこく）」の精神強化と、「堅忍持久（けんにんじきゅう）」の精神により長期戦を戦い抜く覚悟が求められ、戦況が悪化する後年には、貯蓄増加や金属回収といった経済国策への協力が求められるようになりました。

この度ご寄贈いただいた【写真２】「参考文書綴」（史料番号１）は、幸之助氏が母衣尋常高等小学校に在職した期間のうち、昭和 11 年から同 15 年までの行事開催通知書や行事案がまとめられたもので、この時期特有の高揚感と、身近に迫りくる戦火の緊張感を感じさせるものでもありました。また、文書の凡そ半数を占めるのが、陸上競技大会や寒中稽古などの体育行事に関連したもので、年間を通じて盛んに開催されるこれらの行事からは、子供たちの体位向上を目指し、学校を挙げての身体強化が図られたことがうかがえます。今回はその中から、私たちにも馴染み深い、体育大会（運動会）を取り上げて戦時下の体育教育について考えてみたいと思います。

2. 体育大会のはじまり／体育教育の展開

一般に、日本における最も早い体育大会（運動会）の記録は、明治７年（1874）に東京築地の海軍兵学寮で実施された「競闘遊戯会（きょうとうゆうぎかい）」であるとされています（注２）。これは、イギリス海軍顧問団の団長アーチボルド・ルシアス・ダグラスの発案によるもので、兵学寮におけるクリケット場の完成を記念して開催されました。当日は一般参観も許され、軍楽隊が競技を盛り上げました。種目には、二人三脚や障害物競争。１等～3 等に入賞した生徒には文房具やハンカチといった賞品も授与されたといいます（注３）。

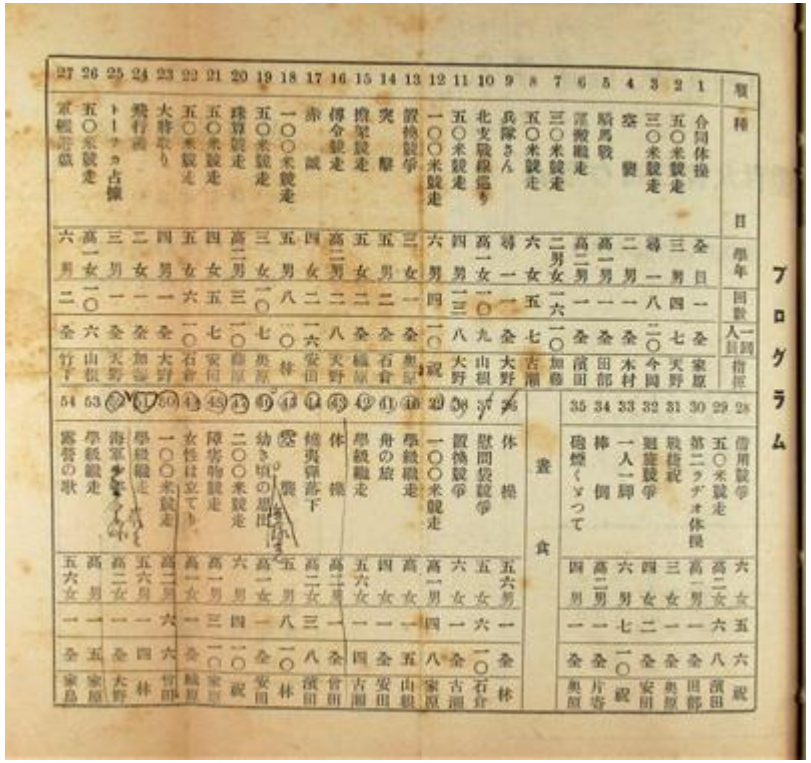
この体育大会の普及・発展において決定的な役割を果たしたのが、明治 18 年（1885）に初代文部大臣となる森有礼（もりありのり）でした。かねてより日本国民の身体能力の向上に強い関心を寄せていた森は、学校教育への「兵式体操」（軍隊式の体操）の導入を強力に推し進めていきました。体育大会は、その成果発表の場として全国へと広まっていったと考えられています（注４）。そのため、当時の体育というと「＝兵式体操」であって、執銃訓練・部隊教練といった軍事教練的な内容に終始する傾向にありました。ちなみに、このような状況に変化が生じるのは、第一次世界大戦後のことです。屈強な体位を有する列強諸国に対峙して、なおも国民の貧弱さを痛感した日本政府は、体育の重要性を認識するとともに、体育教育の強化へと乗り出しました。テニスや野球、卓球といったスポーツが普及し、体育設備の充実や教員による体育教育研究が進むのもこの頃のことでした（注５）。

さて、松江では早くも明治 21 年（1888）に体育大会の開催が見られます（注６）。明治 21 年 10 月 20 日～21 日、松江城内操練場（二之丸）を舞台に繰り広げられた「学生体育大会」は、松江市内 15 学校、延べ 3600 名が一同に会する大規模大会でした。競技演目には、障害物競走や綱引きといった今でも馴染みの競技のほかに、高等科生徒による銃剣術（じゅうけんじゅつ）や師範学校生徒による中隊運動が行われています。これは、先に導入された兵式体操の成果が披露されたものと見てよいでしょう。その他にも、小学科や女学生による唱歌遊戯（「春の弥生」「来たれや来たれや」）や、来賓による綱引きも行われています。さらに、１等・２等・３等に輝いた者には賞与もあったとのことですから、その力の入りようがうかがえます。ちなみに、賞与品には、ナツタル辞書・毛布・『近古史談』・画用紙・綿ネルシャツ・英習字用紙・鞄・靴足袋などが用意されていたようです。見物客には通行券が配布され、これを所有せずして入場しようとする見物人を巡査が制止する、大混雑の有様であったといいます。

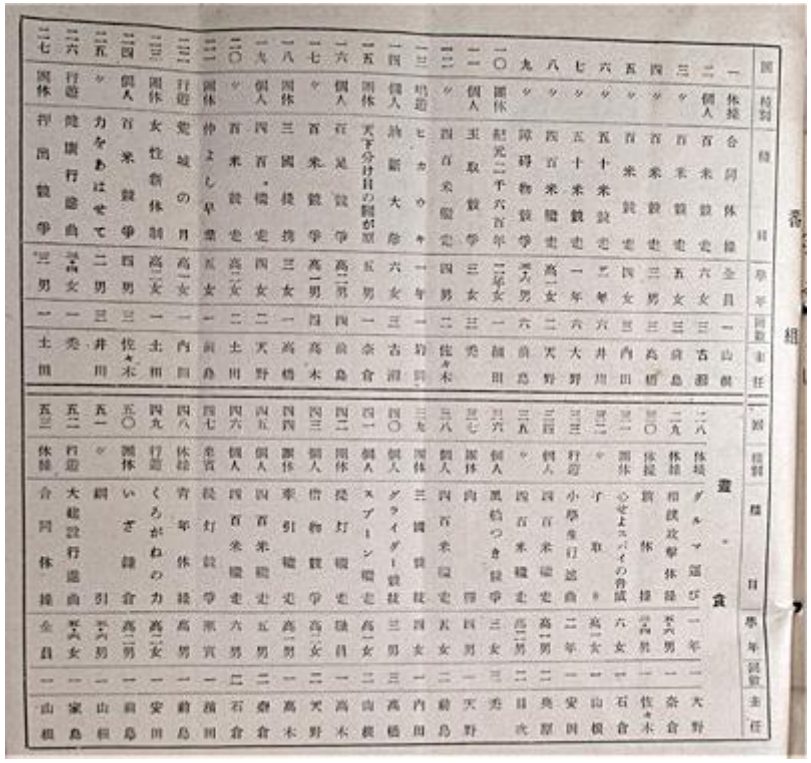
このように、明治時代の体育大会は、現代のように学校単体で行うことは珍しく、開催場所も松江城二之丸や神社の境内（注７）といった公共の場に置かれることがほとんどでした。近隣学校や地域住民をも巻き込んだ、まさに地域ぐるみの一大行事だったのです。

3. 昭和戦前期の体育大会プログラム

「参考文書綴」の中に、大変興味深い史料が含まれていました。下に示す【写真 3】【写真 4】はそれぞれ、昭和 12 年・昭和 15 年に母衣尋常高等小学校で開催された体育大会のプログラムです。詳しく見ていきましょう。



【写真 3】「体育大会プログラム」（昭和 12 年 10 月 19 日）



【写真 4】「秋季体育大会番組」（昭和 15 年 10 月 26 日）

昭和 12 年 10 月 19 日に開催された体育大会は小学校の校庭で執り行われました。総種目数は 54 競技を数え、男女別の競走（かけっこ）・継走（リレー）・体操に混ざって、「空襲」「突撃」「兵隊さん」「トーチカ占領」「伝令競走」「軍艦遊戯」「砲煙くゞて」「焼夷弾落下」「慰問袋競争」といった戦争の模擬的競技が多数含まれていることがうかがえます。大会の最後を締めくくるのは、５年生・６年生の女生徒が歌う軍歌「露営（ろえい）の歌」でした。冒頭の「勝ってくるぞと勇ましく」はあまりにも有名ですから、ご存じの方も多くいらっしゃるでしょう（注８）。このように、同年に始まった日中戦争の影響を色濃く反映したプログラムであったことが分かります。

つづく昭和 15 年も、戦局に影響を受けたと思われる演目が並ぶ点は 12 年と同様ですが、この年はやや特別でした。というのも、「昭和 15 年」は、建国 2600 年の節目の年。神武天皇が即位して 2600 年目にあたるとされる、いわゆるメモリアルイヤーでした。この紀元二千六百年記念の行事は全国各地で宣伝され、体育大会の開催、記念碑の建立、祭礼の挙行等、各地で様々な行事が催されました。改めて、昭和 15 年の「秋季体育大会番組」を見ると、競技演目には「紀元二千六百年」「大建設行進曲」が組み込まれています。これらの競技が一体どのような内容のものであったのかは皆目見当がつきませんが、昭和 15 年の体育大会が、国家行事にならい、紀元二千六百年の奉祝祭として行われたことが分かります。

このように、戦時体制下の体育大会は、明治期に見られたような、他校との連携や住民参加といった地域行事としての性格は鳴りを潜め、子どもたちの戦意高揚を図る場として、時局に対応したより実践的な内容へと変化していきました（注９）。

４．さいごに

以上に見てきたように、体育大会は時代の要請に応じてその姿を大きく変えていきました。戦争が子どもたちの学校生活に様々な制約を加えたことたことは言うまでもありません。しかし、写真に切り取られた子どもたちの姿は、当時の体育大会が賑やかな笑い声に彩られ、盛大に催されたことを伝えています。（写真提供：林健亮氏）

【写真５】端午体育会（昭和 14 年頃ヵ）。開会式。頭上には大きな鯉のぼりが泳ぐ

【写真６】女学生による体操。奥には、待機する児童と競技を見守る大勢の保護者

【写真７】桃太郎に扮した子どもたち

【写真８】母衣尋常高等小学校の体育大会（年代不詳）。摩擦体操（乾布摩擦）ヵ。遠くには松江城が見える

【写真９】女生徒に背負われる男児児童。騎馬戦ヵ

目的も規模も競技内容も今とは随分異なりますが、保護者に見守られ学友と競う１日の忘れがたさは、きっと現代にも共通することでしょう。新型コロナウイルスの脅威が冷めやらぬ中、今もなお学校行事の多くが様々な制約のもとで行われています。県下の学校に再びいっぱいの声援が戻ることを心より祈って、筆を置きたいと思います。

（松江城・史料調査課学芸員／面坪紀久／令和４年９月２日記）

（注１）「Diary」（昭和 17 年,史料番号３）

（注２）吉見俊哉「ネーションの儀礼としての運動会」『運動会と日本近代』青弓社,平成 11 年

運動会の起源としては、慶応４年（1868）年に横須賀製鉄所で開催された日仏人技師・職工による運動会を起源とする説もある（木村吉次「海軍兵学寮の競闘遊戯会に関する一考察」『教育学研究』第 63 巻第２号,日本教育学会,平成８年）

（注３）木村吉次「海軍兵学寮の競闘遊戯会に関する一考察」『教育学研究』第 63 巻第２号,日本教育学会,平成８年

（注４）前掲（注２）

（注５）『島根県近代教育史第一巻通史』島根県教育庁総務課島根県近代教育史編さん事務局編,島根県教育委員会発行、昭和 53 年

（注６）「山陰新聞」（明治 21 年 10 月 22 日）

（注７）明治 24 年 11 月６日には来海神社の庭上において「来海村各小学校生徒連合大運動会」が開催された。来海高等尋常小学校などから集まった生徒総員は 238 名にもなり、多くの観覧者がこれを見守ったという。運動会の最終種目は綱引き。生徒には慰労金が与えられた（「山陰新聞」明治 24 年 11 月 10 日）。

（注８）ここでの軍歌には、連帯感や一体感を演出する装置としての役割が期待されたものと思われる。

（注９）昭和 13 年 10 月 22 日に開催された体育大会は、「傷病兵並に校下出動軍人遺家族の方々を御招待致し…」（「参考文書綴」）とある。単なる学校行事としてではなく、傷病者や戦死者の追悼や慰霊などと結び付けて行われた。